報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	当事者が語る―ハンセン病者と文学者は如何にハンセン病問題と関わったのか
氏　　名	西村峰龍

論　文　内　容　の　要　旨

ハンセン病問題に関わる当事者は何を語っているのか。この問いに応答することが本研究の目的である。本研究では、ハンセン病問題に関わった非ハンセン病者の作家・ハンセン病者の作家をハンセン病問題の当事者と位置付け、非ハンセン病作家を隔離政策の「推進者」「加害者」、ハンセン病者をハンセン病政策の「被害者」・「抵抗者」としてのみ捉える「糾弾の歴史」の克服を目指す。その為に、非ハンセン病作家が書いた小説を分析するだけでなく、従来の研究では、分析されてこなかった選評・講演を考察し、ハンセン病者の作家に関しても此れまで取り上げられてこなかった宮島俊夫・風見治の作品を取り上げて分析する。此等の考察を通して、「糾弾の歴史」の枠内に収まりきらない、非ハンセン病作家・ハンセン病者の多様で矛盾すらも包含する様相から彼等が何を語っているのかを明らかにする。

第一部（第一章から第五章）では、非ハンセン病者でハンセン病問題と関わった小説家・俳人の活動を考察し、国策（救癩政策）に順応的か非順応的かの二元論には収まりきらない彼等の多様で矛盾すらも包含する様相から彼等が何を語っているのかを明らかにする。

具体的には、第一章で、北條民雄没後に川端康成と全生病院医官日戸修一との間で北條の評価を巡って展開された論争について考察する。其の上で、この論争が川端が北條の臨終時の様子を書いた小説「寒風」の成立に大きな影響を与えたことを明らかにする。第二章では、阿部知二の小説「初秋の海にて」の分析を通して、強制隔離政策への肯定・否定の二項対立的図式では判断できない阿部のハンセン病者観を明らかにする。第三章では、阿部がハンセン病療養所機関誌で行っていた選評や講演を分析する。その上で、『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書　要約版』（財団法日弁連法務研究財団　二〇〇五年三月）（以下報告書）の「Ⅱ　文壇におけるハンセン病観」で、阿部の選評や講演に言及することなく、阿部に対して行われたハンセン病問題に関する差別性の評価について反駁する。その際には、「報告書」では言及されなか

った、当時、阿部の選評を受け、講演を実際に聞いたハンセン病者の視点を取り込んだ上で行う。第四章では、前述した「報告書」ではふれられていない非ハンセン病の俳人本田一杉を取り上げる。「俳句救癩」を掲げて戦前から戦後にかけて活動した虚子門の高弟本田の活動を考察することで、これまで、明らかにされてこなかった、虚子門とハンセン病との関係の一端が明らかにする。第五章で、椎名麟三が国立ハンセン病療養所菊池恵楓園機関誌『菊池野』で行った選評を考察することで、従来、取上げられてこなかった椎名とハンセン病との関わりを明らかにする。

第二部では、戦後のハンセン病文学作品を中心に考察し、ハンセン病者が差別・排除を受けた被害者乃至は差別・排除と戦ってきた「闘う病者」像とでもいうような一面的な存在ではなく、様々な当事者性を持った存在であることを明らかにする。

具体的には、第六章で、出征し、戦地でハンセン病を発症したハンセン病者、通称「軍人癩」について、ハンセン病者の作家宮島俊夫の「癩夫婦」を手がかりに分析する。分析を通して、ハンセン病療養所が病者にとって公平・平等なユートピア的世界ではなく複数の階層が存在し、特権性が付与された病者への嫉視・羨望が入り混じる場所であったことを明らかにする。第七章では、第六章で「軍人癩」となったハンセン病者ついて考察したことをふまえて、「軍人癩」の夫を持ったことを隠して戦争未亡人として生きた妻がどのような状況におかれていたかを阿部の書いた小説「黒い影」を通して明らかにする。第八章では、ハンセン病者で被爆者の風見治の小説「コロナ」を分析し、「コロナ」がハンセン病者と被爆者という別々の当事者性を持つ人々の連帯の可能性を示唆している事を明らかにする。「補章」で、菊池事件における療養所内外の救援活動の実態を分析し、当時、最も熱心に菊池事件を取り上げていた療養所機関誌『菊地野』で、藤本の冤罪に懐疑的な療養所者もいる中で、どのような広報戦略がとられていたかを明らかにする。